

自由回答文の分析による都市農村交流の活動評価

- 自治体，地域住民，都市住民に対するアンケート調査の比較分析 -

Activity Evaluation of Urban-Rural Exchange Programs by Analyzing of Free-answer Questions

- Comparative Analysis of Questionnaire Surveys for Municipalities, City Dwellers and Rural Villagers -

真鍋 奈津子* 星野 敏** 豊 輝久***

Natsuko Manabe* Satoshi Hoshino** Teruhisa Yutaka***

(*神戸大学大学院自然科学研究科 **神戸大学農学部 ***日本農業土木総合研究所)

(*Graduate School of Science and Technology, Kobe University **Faculty of Agriculture, Kobe University
***The Japanese Institute of Irrigation and Drainage)

はじめに

本研究は，地域条件や交流活動の内容の違いに即した今後の都市農村交流のあり方や施策の展開方向を考察するために，多角的な視点から交流活動を評価することを目的とする。()都市農村交流活動を支援する自治体，()受入側の農村住民，()交流活動に参加した都市住民を対象にしたアンケート調査の記述式データを分析し，都市農村交流活動が3つの関係主体にもたらすメリット・デメリット，問題点などをそれぞれの視点から明らかにする^{注1)}。この際，地域条件の差(地域類型別)や，交流活動の内容の違い(活動類型別)による交流活動の成果の差違に注目する。

アンケートの概要と分析の枠組

1. アンケート調査の概要

分析に用いたアンケートは，都市農村交流に関する施策の方向を探るために(財)日本農業土木総合研究所が平成15年12月から平成16年2月にかけて，交流活動を行っている全国234事例を対象に実施したものである。関係市町村，交流実施団体，農村住民，都市住民に対してアンケートが実施された。それぞれの配布・回収数と回収率を表1に示す¹⁾。このうち，今回分析の対象としたデータは，アンケート ， ， に含まれている自由回答欄に記入されたテキストデータである。これらの設問内容及び回答数も表1に示してある。

これらの項目はいずれも交流活動に関するそれぞれの主体の主観的な評価・意向に係わる項目である。

本研究でテキストデータに注目した理由は，次の通りである。第1に，交流に関する多様な評価や意向を把握するために，自由度の高い自由回答方式の設問が適しているためである。第2に，結果的に相当数の書き込みがあったが，そのメッセージを丹念に読むと，交流活動に取り組む主体の本音の意見や意向が凝縮されていると判断されたためである。そして第3に，自由回答方式では，選択肢を与えないので先入観を与えることなく，回答者の意見を幅広くみ取ることができると考えたためである。

表1 各アンケートの詳細¹⁾

アンケート	市町村アンケート	
	[配布数/回収数:229/133 市町村 回収率:58.1%]	
対象:	234 事例が実施されている全市町村	
問4	都市農村交流に関するメリット/デメリット [自治体から見て，交流事業が地域に及ぼしている影響]	126 件 /93 件
問19	都市農村交流を支援している背景と趣旨 [自治体が都市農村交流事業に対して期待しているもの]	116 件
アンケート	供給側(農村)住民アンケート	
	[配布数/回収数:1057/769 人 回収率:72.8%]	
対象:	234 事例において都市住民を受け入れている農村住民	
問9	交流活動を継続する意向があるかという問に対し ²⁾ 今後も継続して参加していきたいを選択し，理由を回答してあるもの [供給側(農村住民)が都市農村交流事業に対して期待していることや実際に得られている利点]	408 件
問13	交流活動の課題 [供給側(農村住民)からみた都市農村交流事業を進めていく上での課題，問題，改善点]	304 件
アンケート	需要側(都市)住民アンケート	
	[配布数/回収数:1178/855 人 回収率:72.6%]	
対象:	234 事例において交流活動に参加している都市住民	
問12	交流活動の改善点 [需要側(都市住民)から見た都市農村交流事業を進めていく上での改善点，問題点，課題]	379 件

2. 分析の枠組み

(1) 分析方法の予察

自由回答欄に記入されたテキストデータの分析方法として、テキストマイニングによる分析を試みた。テキストマイニングとは、形式化されていないテキストデータを単語などに分割し、その出現頻度や相関を解析する手法である。テキスト情報の中にあるキーワードの頻度や相関を多角的に分析することで、回答者の意向やニーズを発見することができる。テキストマイニングは、近年石川ら²⁾、田中ら³⁾によって農村計画分野に導入され、新たな解析手法として定着しつつある。

今回のアンケートの主要な質問項目は、自由回答方式であり、回答数も多いことから相当数の書き込みがあり、テキストマイニングに適しているといえる。そこで、分析手法の予察として、1. 『茶釜^{注2)}』によるキーワードの頻度分析、2. 『トレンドサーチ^{注3)}』を使ったコンセプトマッピングを試みた。

その結果、今回のアンケートのように記入された文章が長く、かつその内容が込み入っている場合には、1及び2の分析方法では自由回答に込められたメッセージを十分に把握できないことが判明した^{注4)}。そこで、マニュアル操作による方法なら内容を的確に把握することが可能であることがわかった。手段の妥当性を定量的に比較することはできないが、この方法による分析結果が最も的確に解釈できたためである。そこで、今研究ではこの方法によって分析を行うことにした。具体的な手順を以下に示す。

全回答文を繰り返し読み込み、同一内容だと思われるものを簡潔な文で統一する。

そのキーワードをExcelのピボットテーブル機能^{注5)}を利用し、内容別に出現頻度を調べる。

この時点でもキーワードの種類が多過ぎるためKJ法によって、更にデータをカード化し、似ているものをグループ化して要約文を付ける。

で得られた要約文について の作業を行う。

全体像を把握すると同時に、地域類型別・活動内容別に分類して、以下の比較分析を行う。

(2) 地域類型別の比較分析

都市農村交流はそれぞれの地域資源や立地条件

に依存した地域性の強い活動であると考えられる。そのような地域条件の相違を地域類型ごとに分類し、それぞれに交流活動に対する関係主体の評価を比較して、その地域的な差異を明らかにする。

(3) 活動類型別の比較分析

本アンケートでは、都市農村交流活動の種類を市民農園・環境教育・農村体験・援農・農村移住・就農の6つに分類している。よって、活動別に、交流活動に対する関係主体の評価がどのように異なるかを明らかにする。なお、上述の3つのアンケート調査(, ,)はいずれも活動の種類で分類することができる^{注6)}。そこで、表1に示した6項目の設問を連結して表示し、項目間の関連性を考察する。それぞれの関係主体の評価を比較することで、関係主体間の期待と思惑の違いを仔細に明らかにすることができる。

地域類型別の比較分析結果

市町村アンケート(アンケート)では、各サンプルを都市的地域、平地農業地域、中間農業地域、山間農業地域の4類型に分類することができる。表2は地域類型別にみた回収数と回収率である。4つの地域類型に従って、自由回答文を分類し、比較・分析を行った。なお、地域類型によって差が見られたアンケートの『都市農村交流に関するメリット』及び、『支援する趣旨と背景』の結果を示す。

表2 地域類型別回収率(アンケート)

アンケート	配布数	回収数	回収率(%)
都市的地域	30市町村	17市町村	56.7
平地農業地域	29市町村	16市町村	55.2
中間農業地域	98市町村	60市町村	61.2
山間農業地域	72市町村	40市町村	55.6

1. 都市農村交流を支援する趣旨と背景

表3を見ると、全地域に共通する項目は、『農業振興』、『農業情勢の打開』など農業問題への対応、『過疎化・高齢者対策』、『担い手不足のため』など人口・労働力問題への対応、『農業農村への理解の向上』といった地域のイメージアップ等が挙げられる。中間・山間農業地域の特徴として以下のことが言える。該当地域数が多いこともあるが、都市的地域や平地農業地域と比較して、挙げられ

表3 支援する背景と趣旨(地域類型別)^{注7)}

項目	都市	平地	中間	山間
地域の活性化				
農業情勢の打開				
農業振興				
農業農村への理解向上				
高齢化対策				
過疎化対策				
担い手不足のため				
労働力不足のため				
新規就農者の創出	-	-		
新規定住人口農創出	-	-		-
後継者不足のため	-	-	-	
地域産業の振興		-		-
営農活動の支援		-		-
観光振興	-	-		-
経済効果	-	-		-
グリーンツーリズム事業の促進	-	-		-
交流人口の拡大	-	-		-
遊休農地の有効利用	-			
環境保全	-			
地域資源の活用	-	-		-
地域内施設の利用	-	-		
農業を体験してもらう	-	-		-
住民の意識改革	-	-		-

注) 網掛け部分は共通するキーワードを表す

た項目の種類数が特に多い。よって、交流活動に対してより高い期待を持っていることが推察される。また、『遊休農地の有効活用』、『地域資源の活用』、『地域内施設の利用』といった地域資源保全に関する項目が多く見られる。

2. 都市農村交流に関するメリット

地域類型別にまとめた図を図1に示す。全ての地域での共通点(図中の灰色の楕円部分)として、『地域のPR』、『知名度の向上』、『来訪者の増加』など交流の拡大と地域イメージの向上に関する項目が挙げられている。また、『経済効果』や『地域活性化』などの実質的な効果も指摘されている。

平地農業地域の特徴として言えることは全般的にみて、メリットの指摘が少なく、メリット自体

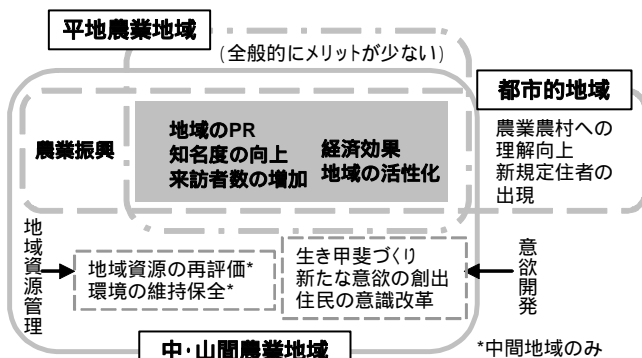


図1 地域類型別のメリット

が多くないと考えられる。中間・山間農業地域は、出現項目が似ていたため1つにまとめた。ここでは、幅広い項目がメリット(肯定的評価)として指摘されている。注目すべき点は、第1に、『生き甲斐づくり』、『意欲の創出』、『意識改革』など住民の意欲開発に関する項目があることである。交流活動が地域住民を元気づけている点は間違いないであろう。第2に、中間地域では『地域資源の再評価』、『環境の維持保全』等地域資源管理に関する項目が挙げられている点である。都市農村交流は中間地域の資源管理や空間管理に一定の効果があることが伺える。しかし、第3に、前節の市町村の支援背景と趣旨で多く指摘された人材・労働力に関する項目がここでは挙げられていないことから、実際にはあまり成果が出ていないのではないかと推察される。

活動類型別の比較分析結果

1. 活動類型の設定とアンケートの連結

実施されたアンケートでは、都市農村交流活動を6つの活動(市民農園・環境教育・農村体験・援農・農村移住・就農)に分類されていた。当初は6類型毎にキーワードを整理して比較したが、いくつかの類型間で、回答項目や、異なる種類のアンケートとの関係などにおいて非常によく似た傾向がみられた。そこで、傾向の類似する活動をまとめて、[市民農園/環境教育/農村体験]と[援農/農村移住/就農]の2グループに大別し、両者の比較分析を行った。これらの活動の性格を考えると、前者は農村での一時的滞在による活動、後者は農村での恒常的滞在を伴う活動に対応している。そこで前者をイベント型活動グループ、後者を共生型交流活動グループと呼ぶことにする(表4参照)。

ここでは、3種のアンケートを連結し、設問項目をそれぞれ表1の【】内に示したように解釈し、2つの活動類型別に比較・分析を行う。これによって、自治体、農村側、都市側の考え方の相違を明らかにする。その結果をまとめたものが図2、3である^{注7)}。

2. 両活動の共通する傾向

まず、交流の成果に関する共通点としては次の

表4 活動類型とその特徴

活動類型	イベント型活動グループ	共生型交流活動グループ
含まれる交流活動	市民農園(62)/環境教育(71)/農村体験(127)	援農(40)/就農(23)/農村移住(24)
性格	農村での一時的な滞在: 非日常的な行為として農村地域を訪問する	農村での恒常的滞在: 日常的に農村で生活する
特徴	一過性のイベント的要素が大きい交流	移住・双住につながる可能性のある半永続的交流

注) 括弧内の数字は件数を表す

ことが言える。『地域の活性化』が 継続理由(), メリット・支援背景と趣旨()で現れている。活性化の意味合いは広いが、活動を担う自治体と農村側にこの項目が現れていることは、交流活動が地域活性化に貢献していることを意味している。とりわけ顕著な例は、『生きがいづくり』や『意識改革』、『意欲の創出』等精神的な効果であり、人々との交流が精神的な効用をもたらしていると考えられる。この他、改善点()に『地域住民との交流』、『参加者間の交流』、継続の理由()に『人との交流の活発化』等が挙げられている。よって農村側と都市側が共に交流に対して積極的な意向を持っていることが伺える。また、同様に地域資源管理(『地域資源の活用』・『遊休農地の有効利用』等)や環境に関する項目(環境保全)も共通している。

続いて交流活動の運営に関する共通点を以下に挙げる。第1に、人材に関する項目である。支援

背景と趣旨()を見ると、自治体も地域住民も交流事業によって『高齢化対策』や『過疎化対策』の打開を期待しているが、メリットに全く登場しない(図中の太点線の楕円の部分を指す)ことから、実際には解決にあまり貢献しておらず、むしろ、課題()に『高齢化による継続危機』、『人材の確保』等が挙げられているように高齢化や過疎化が活動の持続のための障害になっていることが推察される。

第2に 経済的な問題である。運営する側にも、参加する側にも経済的負担が生じていることが分かる。自治体側では、支援背景と趣旨()に『経済効果』や『地域産業の振興』を挙げているがデメリット()で『経済効果が見込めない』、『財政的負担』という項目が出ていることから期待していたほど十分な経済効果が見込めず、それが活動をしていく上で負担になっている(課題()『予算不足』等)と推察される。これらは、デメリット()・課題()・改善点()に挙げられていることから市町村、農村側、都市側に共通した認識であると考えられる。

第3に、活動時間に関する項目である。農村側は『時間的に余裕がない』人が多いことが分かる。一方都市側は、『活動時間の増加』、『農業体験の時間を増加』という項目から活動時間の増加を

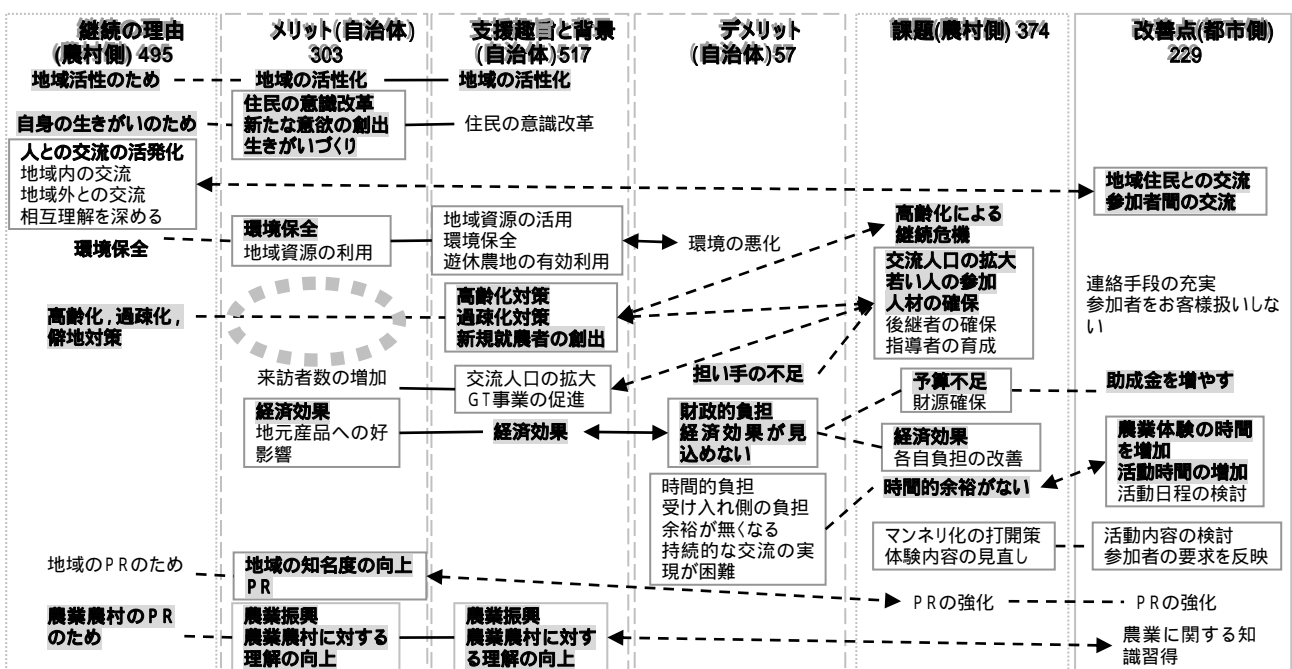


図2 イベント型活動に対する意向のまとめ^{注7)}

望む傾向にあり、両者の意見が相反していることが分かる。

3. イベント型活動の傾向

イベント型活動は、共生型交流活動よりも、『来訪者の数』、『活動内容』、『活動時間』など、交流事業に直接関係する項目が多くあった。また、PRに関する項目は、継続の理由()・メリット()・課題()・改善点()に見られることから3者の共通の認識であることが分かる。その理由としては、一過性の活動であり、新規の来訪者獲得のために常に地域外への情報発信が必要となるためと推察される。課題()と改善点()の両方に『活動内容の見直し』が挙げられている。これも活動の性格上、マンネリ化すると活動の継続が難しくなるためではないかと考えられる。更に、課題()と改善点()で着眼点と考え方の類似した項目がいくつかある(図中で両者の間の点線・矢羽根なしの線部分)。その理由は、活動の性格上、イベント的要素が強く、都市側だけではなく農村側も非日常的な時間を過ごすので「共に参加する」という姿勢が強く、同じ視点から活動を捉えているためではないかと考えられる。

4. 共生型交流活動の特徴

共生型交流活動では、課題()においてイベント型活動で見られなかった課題(『施設の整備』など)が指摘されている。このことは共生を図るため

には、交流活動以外にも生活環境の改善を含めて総合的な対策が必要であることを示唆している。また、イベント型活動と比べて支援背景と趣旨()において『農業情勢の打開』、『営農活動の支援』など直接農業に関わる活動が多いため、農業の振興に関する項目が多い点も特徴である。イベント型活動の支援理由が交流の拡大自体にあるのに対して、共生型交流活動では産業の振興にあるためといえよう。さらに、精神的な効果の項目が頻出しており、デメリット()で『住民内部での意欲の差(温度差)が大きい』、課題()で『意識改革』が挙げられている。理由は、共生型交流活動の方が特定の都市住民と長期間に渡って交流していくためではないかと考えられる。そして、イベント型活動では課題()と改善点()で着眼点と考え方が同じ項目がいくつか挙げられているのに対して、共生型交流活動では、課題()で『予算不足』、改善点()で『資金の確保』という点以外共通点がなく、主体間で意向が食い違っていることが分かる。共生型交流活動の方では、一緒に活動に参加するというよりは、農村の日常を都市側が体験するという内容であるため農村側が“迎え入れる”姿勢になり、それぞれ異なる立場から活動を捉えているためではないかと推察される。

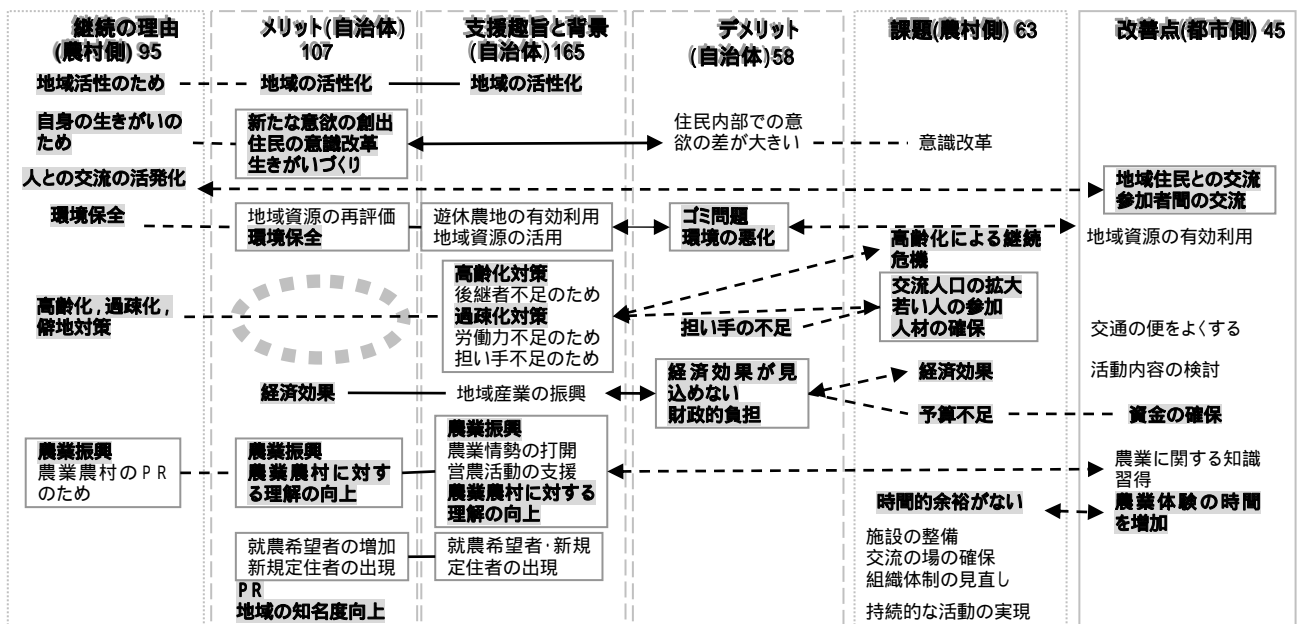


図3 共生型交流活動に対する意向のまとめ^{注7)}

おわりに

本研究では、自由回答欄に記入されたテキストデータを地域類型別、活動類型別に整理し、考察した。最後に、分析結果の総括と交流施策の展開方向に関して若干の点を指摘しておく。

まず、地域類型別に交流活動の評価を比較した結果、様々なメリットが数多く指摘されたことから、ある程度取り組みの成果が出ていると考えられる。中でも中山間地域ではより多くのメリットが指摘されたことから、都市農村交流は中山間地域の特性に適合した振興施策であるといえよう。また、住民の意欲開発と地域資源管理に関するメリットも指摘された(図1)ことから交流活動に意欲向上や地域資源保全等の副次的効果があることも推察された。しかし、多くの中山間地域の自治体が都市農村交流に取り組むねらいは過疎化・高齢化・担い手や後継者の不足などの問題を解決することであるが、これについては大きな成果を上げるまでには至っていない。

続いて、6つの活動類型をキーワードの出現パターン類似性からイベント型活動と共生型交流活動の2つに区分して、3者の考え方の相違を整理した。両者は、活動の性格が異なる面があり、同じ都市農村交流の枠組みで議論するのではなく、政策的にみると異なる枠組みで捉える必要がある。

イベント型活動の場合は、交流それ自体が中心的な目的であり、文字どおりイベント的な性格が強い。マンネリ化を回避し、新規の来訪者を獲得するために常に企画力と地域外への情報発信力(PR)が必要であり、これらの面での支援施策が求められている(図2)。他方、共生型交流活動の場合は、地域農業の振興施策としての性格が強い。精神的な効果の面では、デメリット()で『住民内部での意欲の差が大きい』、課題()で『意識改革』が挙げられており外部者が地域の中で共生するためには、外部者はもちろんのこと、受入側(自治体、農村住民)にも相応の覚悟が必要であ

Summary : The Japanese Institute of Irrigation and Drainage (JIID) carried out the three different questionnaire surveys all over the country for () the municipalities that promote urban-rural exchange programs, () the city dwellers who participate in the exchange programs and () the rural villagers who accept them. We analyze a great deal of text data for the free-answer questions of the questionnaires. It turned out that urban-rural exchange suitable for promotion of Hilly and Mountainous Areas and has an effect in residents' consciousness reform and environmental preservation, on the other side, has come to cancel decrease in population and aging.

ることを示唆している(図3)。

もちろん両活動には、共通点も多い。メリットとして交流の経済効果が指摘される一方で、デメリットに『経済効果が見込めない』、農村側の課題に『予算不足』、都市側からみた改善点に『資金の確保』等の指摘もそれぞれある。このように経済的効果の発現状況には濃淡があり、普遍的な効果があるとまでは言えない。また、交流に伴う関係者の負担増や自然環境・景観の悪化の問題もある。しかし、都市農村交流には『意識改革』や『環境保全』に交流の成果が見られ、これらは高く評価される必要があるだろう。

【注釈】

注1)本調査は、交流活動の量的把握を目的に実施されたため、本論で扱うような「活動の質の評価」に使用できる質問項目は含まれていない。このため本論では記述式データのみを分析の対象とした。このため、本分析では定性的な分析であることをお断りする。反面、通常の見聞式アンケートでは把握できない意向の評価を汲み取ることに成功している。

注2)奈良先端科学技術大学院大学が開発した日本語形態素解析のフリーソフト(<http://chasen.aist.ac.jp/>)

注3)(株)富士通ソフトウェア生産技術研究所のテキストマイニングソフトの商品名

注4)1の方法では形態素解析によって得られた単語の頻度を抽出するので、複雑な内容を的確に捉えることができない。また、2の方法では、ソフトの制約により50語までしかマッピングできないため全体を把握することができない。

注5)Microsoft Excelに搭載されているクロス集計機能。
注6)本文中で、()、()はそれぞれ自治体、農村側住民、都市側住民を意味する。

注7)1. 図及び表の中の項目はそれぞれの質問項目で回答頻度の高い回答である。また、内容の類似した項目を枠線で囲んでいる。

2. 関係する項目を線でつないでいる。図中の実線は同じ主体間、破線は異なる主体間をつないでいる。また、矢羽根なしの線は、意見の一致、矢羽根付きの線は意見の相違を表す。また、太字・網掛けは両類型に共通する項目である。

【参考文献】

- 1)日本農業土木総合研究所(2004):平成15年度農村振興整備状況調査(都市と農村の共生・対流に関する検討調査)
- 2)石川修・星野敏(2004):テキストマイニングを用いた都市農村交流ニーズの把握.農村計画論文集,第6集,(181-186)
- 3)田中裕人・大久保研治・上岡美保(2004):NPO法人による緑化ボランティア養成研修の参加の要因に関する分析.農村生活研究,第48巻第2号,(6-16).